

静岡新聞

1月4日
木曜日

〒422-8033
静岡市駿河区登呂3-1-1
静岡新聞社
電話(054)282-1111
月決め2,980円 本体2,750円
消費税221円
1部130円(消費税込み)
©静岡新聞社2018
浜松総局 浜松市中区旭町11-1
プレスタワー内
電話(053)455-3355
東部総局 沼津市魚町1
サンフロント内
電話(055)962-0380

生きづらさに寄り添う

無知の知 「てんかん」という現実 3

乳幼児のてんかん患者が数多く入院している国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター(静岡市葵区)のA4病棟。2017年12月初め、いつものように看護カンファレンス(会議)が始まった。報告者は山田久美子看護師(49)。

現在は退院して保育園に通う園児のケースを引き合いに、てんかんに対する病院の内と外の隔たりを、見たまま感じたままに同僚に話した。

退院前、保育士らに医師や看護師、療育指導のスタッフが発作への対応や発作による受傷防止策などを助言した。そのアドバイスは生かされていかなかったのか、新たな問題が起きていないだろうか。山田さんはカンファレンスを前に、自分の目で確かめようと保育園へと足を運んだ。

看護師の思い

序章 治療の現場で ③



患者の様子などを報告し合う看護カンファレンス=2017年12月上旬、静岡市葵区の国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター

慌てることはない。コールの大半は、患者が発作が起きたことを意味している。それが山田さんにとつての日常。だが、病院から一歩離れた世界は認識がまるで違ふと改めて思いついた。

「てんかんにステイタマ社会のイメージがあるとは知らなかった。成人患者が入院するA6病棟の小林里美看護師長(44)は、着任した約1年半前を振り返る。

小林さんのそれまでの約20年にわたる看護経験は、ほとんどが急性期患者と向き合う現場。救命センターなどで

事故や病気で一命を取り留めた人たちが晴れやかな気持ちで送り出してきた。だが、国立病院機構静岡てんかん・神経医療センターで働いてみて、ショックを覚えた。過去に命を救ってきたような人たちが、後遺症としててんかんを発症し、苦しんでいた。働き盛りなのに仕事を辞めた人。40歳を超えても、自宅から出られない患者。長年臨床現場にいたのに、なぜ受けなかったのだろうか。センターの患者に接し、それぞれ心の葛藤を聞いて、がくせんとした。てんかんを隠して暮らしている現実があった。

メモ

国立病院機構静岡てんかん・神経医療センターの看護部では、てんかんの専門知識を持つ看護師を「院内認定看護師」として独自に養成している。養成プログラムは2年かけて行われる。専門医らによる講義14科目17時間と実習3日間、リハビリの見学などの後、事例検討発表と筆記試験の結果で認定される。2010年3月以降9人が誕生し、患者の治療に寄り添うだけでなく、院内外での啓発活動に取り組んでいる。